＜前回＞「科学技術とキリスト教」系の動向を見る

１．現代神学の前提：1920 年代から 1960 年代へ。

・19 世紀的状況へ批判的分離：自由主義神学＝近代的学としての神学

実存・生へ

・19 世紀からの継続：特にドイツ神学の場合。自然から精神・自由へ

空間に対する時間の優位

地理　　歴史

↓　　カントもハイデッガーも

・現代神学における「自然」の忘却

自然あるいは自然科学を神学的に論じる基盤の喪失

２．「科学技術の神学」系

・科学論の神学

・「宗教と科学」関係論の基礎理論、プロセス哲学

・「宗教と科学」関係史

・現代科学がもたらした新しい問題状況

理論的と実践的あるいは倫理的

生命・環境・心・脳・原子力

（１）科学技術の神学の衰退

３．神学と科学との分離＝対立の原理的回避　→　無関係・無関心

近代の知的世界との差異化による固有領域の確保の試み（＝止めどなき後退戦）。

これと弁証法神学の構想（神学の本来性の回復）がリンクした。

４．そのために採られたのが、意味と事実との区別――宗教は人間の生きる意味・価値に関わり、科学は事実に関わる――、あるいは客観的真理と主体的真理（キルケゴール）の区別という論理である。たとえば、ブルトマンの聖書の非神話化 (Entmythologisierung) あるいは実存論解釈はその典型である。

世界観と信仰との分離（聖書テキストの世界観的枠組みと信仰内容との分離）

聖書と科学の対立は、古代的世界観（黙示文学、グノーシス主義を含めた）と近代的世界観との対立に帰着できる。

こうして、宗教と科学の対立は原理的に解決を見たと言える。

５．創造物語に表現されているのは、創造の善性と概念化された信仰内容であり、創造物語は、事実のレベルで、宇宙や人間の発生を論じているのはない。聖書は科学の教科書ではない。大切なのは、人間には神によって与えられたそれぞれ固有の存在意味、存在価値があるとの信仰、そして人間は他の存在者との関わりにおいて活かされて存在しているというメッセージである。

６．こうして、科学と神学との接点は希薄になる＝「科学技術の神学」の衰退

（２）ブルトマンの実存論的神学の場合

２．近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立

近代人は聖書的な宗教を信じうるか？

→　信仰の事柄（宣教、内容）と世界観（形式）との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。

３．聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
４．キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
　　信仰と世界観との区別・分離　→　信仰の主体性の純化
　　これは個人的な事柄か。
５．聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
　　世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。
　　ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）
６．説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）
　　→　ブルトマン学派における「言葉の出来事」
　　神の語りかけと決断
８．ブルトマン神学の骨格：鋭いが狭い。
①言葉の出来事性：語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断
②時間性―終末論的（そのつどの今）→決断・聴従
③理解：神理解―自己理解（神学―人間学）の循環
④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違
⑤客観性→主観性・主体性
　　→自由の処理できない・神の主権

（４）「科学技術の神学」の再生

１．科学と神学の分離論への疑問
・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？
　　決断の抽象化
・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。
　　神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。
・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方で前提にしていないか。
　　科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？
・意味概念（意味世界）は、分離論においては一面化＝抽象化する。
　　意味は、主観性、客観性、相互主観性のすべての包括する。
２．神学は、科学技術に対する批判的な関わりから離脱しえない。解放・救済の問いを手放さないかぎり。「科学技術の神学」の再生は不可避的である。しかし、その基盤は？

２．　科学技術の神学と聖書学

（１）なぜ聖書学か

１．現代の環境危機、３・11 の東日本大震災において発生した原発事故。
　　キリスト教思想においても、科学技術の在り方を根本的に再考する必要性。
　　しかし、長年の自然の忘却はいまだ大きな後遺症を残している。
２．キリスト教＝多元的多形的な事象。
　特定の教派や思想家がキリスト教全体を単純に代表できないことは明か。また、科学技術もきわめて多様。
３．キリスト教の多様性　→　聖書テキストへ、聖書学という方法論の意義
４．科学技術の多様性　→　人間存在へ

科学技術の主体としての人間に注目。

５．聖書テキストから人間存在の基礎理解を取り出す。

聖書の創造物語と、存在論・人間学という二つの軸を設定する。

（２）聖書の人間理解、聖書から人間存在へ

６．創造物語の人間存在理解の基礎テキスト

・「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記 1 章 27 節）

・「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記 2 章 7 節）

・「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」（創世記 3 章 6 節）

↓

①神の像／支配（創世記一章）

②土の塵／耕す／命名（創世記二章）

③堕罪（創世記三章）

①と②：人間存在の有限性。①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味する、②はその善性において成り立つ人間の行為。

土を「耕す」（創世記 2 章 15 節）は「技術」に関連し、「命名」（創世記 2 章 19 節）は「科学」に直結する人間の行為である。世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させるこれらの行為は、まさに科学技術の原型というべき営み。

科学技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属する。

人間は本来、耕す存在、つまり農民である。

これらの行為は、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ――「神はお造りなったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記 1 章 31 節）――の帰結。

③：善なる本質の歪曲＝疎外。

人間存在：本質存在と実存存在という二つの規定。

７．ティリッヒ：有限性と疎外、本質と実存との二重性を、人間的生（＝人間の現実存在）の両義性と解する。

人間存在の行為としての科学技術は両義的である。

８．両義性を前提にするとき、最近の話題あるいは問題との関連で次のような問いが生じざるを得ない。原発は悪、ｉＰＳ細胞は善といった議論は可能か、あるいは原子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

９．この創世記の人間理解のラインで、聖書テキスト全体を一貫して読むことができるか？

・都市批判＝大規模文明批判、ノア、バベル、ソドム・ゴモラ、バビロン、ローマ？

都市と悪徳

・エルサレムと王権：本来のイスラエル的理念の変貌？

・貨幣の問題、税

・都市と農村

（３）科学技術の両義性から歴史性へ

10．原初の人アダム＝耕す人（農民）＋名づける人

科学技術の原型、人間存在の本来性（創造の善性）に属する

11．科学技術の善性＝光

福島の原発事故以前の原子力の平和利用という議論、現代のｉＰＳ細胞について流布している「善」というイメージ。

12．科学技術の影の側面：聖書における文明批判。

前提としての聖書における堕落物語

13．人間存在の存在論的考察の限界＝歴史的パースペクティブの必要性

近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的変化

人間存在の両義性における疎外・歪曲面の作用がその効果を顕在化した。

14．近代という時代、まさに 20 世紀、劇的な仕方で前面化する。

15．ハンナ・アーレント『人間の条件』とパウル・ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」

16．ハンナ・アーレント『人間の条件』の書き出し。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」（アーレント、1994、9）

スプートニク一号の成功が「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件」（同所）であるとした上で、その意義・問題性を、「人間の条件」との関わりで論じている。

↓

20 世紀の科学技術は、「人間の条件」を大きく変容させようとしている。

17．人工衛星が目指す宇宙空間は、「人間の条件の本体そのもの」である地球（＝大地）から切り離された空間領域であり、ここに顕在化しているのは、この「人間の条件から脱出したいという望み」（同書、11）（＝欲望）である。

大地から脱出したいとの欲望こそが、「人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学との背後にあるもの。

創世記 3 章の堕罪物語は、この「人間の条件」（＝人間存在の有限性）からの脱出の欲望との関わりで解することが可能。「食べたい」として目覚めた欲望。蛇はアイコンあるいはスイッチ。

科学技術の影の側面はこの欲望の現象形態にほかならない。

暴走する欲望と資本主義の関係は？

18．ティリッヒの講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」（『宗教の未来』）。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」（ティリッヒ、1999、42）

宇宙探検はルネサンスから啓蒙主義に至る「水平線の発見」（＝神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向）あるいは「円環と垂直線に対する水平線の勝利」と特徴づけられる近代特有の精神動向であり、「十九世紀的な世界的進歩への信仰」はこの線上に位置づけられねばならない。

19．宇宙探検に至る精神動向。

「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであった。つまり、『母なる大地』から『母なる』という性格を奪ったこと、つまり彼女から、命を与え、養い、抱擁し、彼女のために育て、再び自分のところへ呼び戻す、といった性格を奪ったことである。母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」（同書、50）

20．古代から継続的に進展してきた「大地の非神秘化」は、現代の科学技術においてかつてないほど徹底化した。

原子力技術は、自然界に安定的には存在しない元素を生み出し「外となる自然」の改変を可能にし、遺伝子工学は人間の「内なる自然」の改変を理論的に可能にした。

21．この地球脱出の欲望の前面化は、現代の文明内部に大きな不安を生み出した。人間存在の両義性と呼んだ構造的なレベルから生じる、両義性の不安。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」（同書、49）

↓

核兵器において、「人間は自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実」に直面。「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」（同所）。

科学研究の軍事研究との結合！

（４）科学技術の肯定論と文明という視点

22．再度、科学技術の両義性の光の面　→　神の創造行為の器としての科学技術

23．賀川豊彦

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」（賀川、2009、45）、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」（同書、46）

24．神と人間との関わり、特に神の摂理と人間の自由との関係性というキリスト教神学の古典的な問題。

賀川：神の意識・働きが人間の意識・行為に媒介されて現実化すること、神の可能性を信じその実現のために行為する人間の働きなしに、神の摂理が自動的に実現すると考えるのは神を機械仕掛けの神にする迷信であることを主張する。

この人間の行為には、当然科学技術も含まれている。

25．再度、創造論へ。

キリスト教創造論：一回的な天地創造（原初的創造 creatio originalis）以降、神は創造行為を継続している。世界の存立を支え続け（継続的創造 creatio continua）、世界を完成

へを導く（完成する新しい創造 creation nova）。

神の救済行為もいわば第二の創造という特徴を有している。

cf. 理神論

26．賀川が、神の愛は人間の行為というチャンネルを通して実現すると語る場合に問われていたのは、この継続的創造。

神の行為は奇跡的な直接的な世界への介入ではなく、むしろ世界の内的プロセスを媒介した継続的創造。

神は、実に進化のプロセスを介して間接的にしかも確実に世界に作用を及ぼすことができる。神の創造行為が、生命世界のプロセスを超えて、人間の歴史的営みを通しても継続されると考えることは不可能ではない。

27．フィリップ・ヘフナー：「創造された共同創造者」（the created co-creator）。

人間は神の被造物であるが、神の行為が現実化することに自らの創造的な行為において共同する存在者、神の創造行為に参与する者であるということ。

この人間の行為には、科学技術が含まれており、神は科学技術を通してその創造行為を継続し世界プロセスを導き続けている。

28．コール＝ターナー：「創造された共同創造者」に依拠した科学技術論の問題点を確認。「われわれは、科学技術を共同創造として、つまり、創造における人間の協力として考えるとの提案を考察することから始めたい」（Cole-Turner, 1993, 98）、「フィリップ・ヘフナーは、われわれが自らを創造された共同創造者と考えるべきであると論じている」（ibid., 100）、「科学と科学技術は神の持続的な創造的作業に仕えている。」（ibid., 101）

＜参考文献＞

１．ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。（Hannah Arendt, *The Human Condition*, Second Edition, The University Press of Chicago Press,1998（1958）.）

２．ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」、パウル・ティリッヒ『宗教の未来』聖学院大学出版会、1999 年、42-58 頁。（Paul Tillich, "The Effects of Space Exploration on Man's Condition and Stature," in: *The Future of Religions*, Greenwood Press, 1966, pp.39-51.）

Paul Tillich, *Systematic Theology. vol.1*, The University of Chicago Press, 1951.

「水素爆弾」（1954）、「ベルリンの状況における倫理的問題」（1961）（ティリッヒ『平和の神学　1938-1965』新教出版社、2003 年、所収。Ronald Stone（ed.）, *Theology of Peace. Paul Tillich*, Westminster/John Knox Press, 1990.）

３．Ronald Cole-Turner, *The New Genesis. Theology and the Genetic Revolution*, Westminster/John Knox Press, 1993.

４．賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、2009 年。（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.）

５．モルトマン『神学的思考の諸経験』新教出版社、2001 年。（Jürgen Moltmann, *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*, Chr.Kaiser, 1999.）

Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre, Chr. Kaiser, 1985.（モルトマン

『創造における神――生態論的創造論』新教出版社、1991 年。）
『科学と知恵――自然科学と神学の対話』教文館。
６．芦名定道『自然神学再考――近代世界と　キリスト教』晃洋書房。
「現代思想と〈神〉の問い――ティリッヒからジジェクまで」（『理想』No.688、理想社、2012 年、40-52 頁）。
「ティリッヒ――生の次元論と科学の問題」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000 年、1-16 頁。
「Ｐ．ティリッヒと科学論の問題」　（東北学院大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』第 20 号、2002 年、1-31 頁）。
『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994 年。
７．Theodore Hiebert, *The Yahwist's Lnadscape, Nature and Religion in Early Israel*, Oxford University Press, 1996.
８．島薗進「生命科学のグローバルな競争と国際規制」（『福音と世界』2013.1、新教出版社、14-22 頁）。
９．賀川豊彦『宇宙の目的』（1958 年）（『賀川豊彦全集』13 巻、キリスト新聞社）。
10．波多野精一『宗教哲学』（『宗教哲学序論・宗教哲学　他八篇』岩波文庫）。
11．Wolfhart Pannenberg, "The Concept of Miracle", in: *Zygon*, vol.37.no.3（September 2002）by the Joint Publication　Board of Zygon. pp.759-762.
12．金承哲『神と遺伝子――遺伝子工学時代におけるキリスト教』（教文館、二〇〇九年
13．Ａ・Ｅ・マクグラス『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』教文館。
14．ゴードン･Ｄ・カウフマン『核時代の神学』ヨルダン社、一九八九年。（Gordon D. Kaufman, *Theology for a Nuclear Age*, The Westminster Press, 1985.）